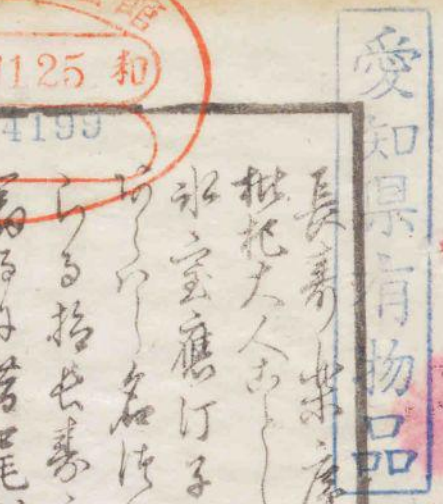
枇杷園七部集五編

913
イ
2-5

長壽楽　杯拍子　みのむし　なきふくへ
玉うさき　桂和の秋　あそ結戸



枇杷園七部集五編

尾陽　東壁堂藏

愛知県文化会館
昭 39.11.25 和
114199
愛知県有物品
A913
イ
2-5

長壽楽序

枇杷大人おとし七十にまたらハせりけれハ
水宝應汀子大人を壽きて小集を
ゆらはし名ほ事て長壽楽と称
する指長壽楽といふことの有よしを
着るに芳尾張連演主年百十三に
して自ら作れる長壽楽を清源殿
のこうまへに舞ふ事曲をうなりけれ
及てハ少年のことしとゆる有年に
よりこれなりしとて是大人を
志す演主乃おとくなりしめむの

おきおとなり大人好き事ハ不これと
異なりまと長壽ハ粉ひとしくして
書状月花に楽しき法から乃
發句をうたひすひ曰て楽しき
盡願ひすめて交ゆる集の名
面白きゆる長壽楽長壽楽く
長壽楽を賞るも壽詞なりしとやそ
ゆい法にて席と寿

大鶴庵

年はむやとしくに垂のうつてき
霧に肥る枇杷窪の　松　鷹汀
山雀を日雀も帰る木瓜咲て　鹿野
をの食なりしきちおりなり　求巳
夕月ハ椽の下より出るやうん　楳間
二変ならんしたる豆か蔓をつ　野
大牛の肥るにこく雪のまとひ　汀
筧をはしむ萱寺の　水　間
徑験の妻か苦をなく詩を讀て　巳

士朗

歳來しくれの樽の封を切　朗
さゝ牛のまゝ〳〵藪の重り濟　野
くしかぬまでなるく口給して　汀
恨ある勸にとのいはせた紀　間
書きハ苔のなくひなりくる　巳
すゝ風の吹も吹たり湖の上　汀
ほつほとゝきを語もなき月　北
一捆にまゝにを傍ゆ花のくせく　巳
その代川田か書の閑さ　間

○踈影横斜
水清淺

批七部五ノ上二

山に鳴るき書あり樹の下傳ひ
水うほをしきロか菓の月　旭宮

暗香浮動
月黄昏

よきおとゝ花のかを行る山語ゝ
誰かロか菓の笠作りして　左扇

○蘭省花時
錦帳下

大空に隈なき霧の斷ゝ
朝日殘運ふ和家の浦浪　金陵

盧山雨夜

草庵中

俤ミしくてそ花の春
霧の眠りの長閑なりける　藍岱

○茂韓直疑
子載左

住俤てかしお紀行の林ゟ
陽洗ふ山の井の水　雪洲

菅家長貫
四時春

よしの山若口ひとの犯し紀
松ハ朝の花にそ有ける　為問

○あらいそかしの春のさくらやな
さくミ出咲ぬと聴なかなのめかし
さくらひもそつと山の翁のいひ
おさせるなにもと急見人家花
使入とうらひつくり笠さくら

松もふ門おもはぬかとも櫻ゟ　月居
白川の橋を渡出ハ神さくら　翠川
松とのミ見ておく山上さつ櫻　玉屑
花まつやたく一う色の苣の雨　葛井
ゝふ来さハ今日まさハとて櫻ゟ　黄山

くきまくハ花ともいたぬさくらぶ　梅葉
なほ中に通る家あり花蓋　成美
出おほをてちいさく来ぬ花の月　雄渕
ゆめ入て花にそのいふ獨かれ　求巳
そのいへハ唇にはくはくらぶ　万和
花もりもよ紀夢を見よ月と花　古猿
いそかはしものや花見の雪の春　永安
山本や花にあをゆく飯煙り　平安
雑の万に樓見て来て老にけり　巣兆
湖の水かさきけり花くもり　士巖
さし波や花に宿かる七所　卓池

同の花に嵐の起るさくらぶ　五道
花に来て鳴と見えて松々山雪　沙鴎
白雲の中にも花のちかしらぶ　岳格
人もこゑたゑとなりけり河し山　昆明
ありくと春をおく花のあり山　五来
こよし雲ハ花にたつ春の鞍ぶ　大巣
こよし雲やそこにはこえて花曇　琴洲
みよしのゝ秋ハ志しき花の　蓍　完来
ちる花のよしのを出る乞食ぶ　野秀
花に寐し乞食ハ何所の　何仏　硯静
いけもちる松葉ハ花のおもしぶ　五雄

小さむきハさまたゝ花の蕾ゝ　蓑虬
ちるものハ花をうりなる木のるゝ　梅老
花さくや人に拍子ゝ清いて来る　田江
江のよにひと位もつ櫻　かゝ　竹秋
薬ゝ御しを雲や櫻の四ツ時分　仙風
嬉に清いて歩けよ花の伏見脇　木天
花のちりかゝるも花の暑とりゝ　芳水
花悩むかをより沖の篇かゝ　李臺
三日月や何所に消ても花の山　国水
志しぬ人の折て人ゝ見ゝ山櫻　牛心
行春の衣にそめよ花さくら　几隠

隅くの春くなりけり　山櫻　脇荘
松風に宵さくらのふゝ春ゝ　大商
ゝふの日は年に二度なし花蕾　樗坐

○

月あれハ松下清河ハ月夜ゝ　桂五
神月をまたゝ鶴山も閑なり　宇洋
春清秋につゝ見て夜し神月夜　月底
蕊ゝのハ志めりうちなりゝ二日の月　素剛
名月や鶴中の家の　桂立　椿堂
名月ハ菓の枕の如なれ　や　千阿
名月や伊勢の松むら住ふるも　寉鳴

名月やかきしになくも隅田川　月巣
名月の面や柱の　泣　面　長翠
名月や乾坤多の西く　石　平角
名月やつきひらもこぬ佛連　栗大
名月に山鳥の尾の薄暑　雄途
翌日雲すてゐる名月の蔬が　對竹
何事もにふの月見るたよりが　喜年
人さしにつきてなしにふの月　帯梅
にふの月草の垣根のたまゆ連　長安
天の川に志りしこゝきよにふの月　可興
よりぬきて十六歳にしく成なり　鞍風

秋の東の石ふにあまる月夜が　雲帯
月おしむ獨に年の宵ものゝ　尺丈
をのゝきに稲妻見ゆる月夜が　而后
秋の月柳十里の薄かもり　友国
人の事て月に嫌ふる戸口が　孔阜
梟のたのまゝなるも　松の月　車大
松ハ月の葉なり月ハ松の上　秋国
月ハいつさまを薄の二ほたまり　乙二
松風も滝も長きる月夜が　梅洲
門へ出て荻をひつしく月夜が　介亭
石山の石ハかきぬか松の　月　木容

月に出る事日後姨捨の菓枕　干當
掛きこ紀月や春中の海の上　牟凡
蟠螭をすき過月のむしろ　可行
湖の水の色なり夏の月　[illegible]
后の月始りもとの八月なる　大蘇
白露ハ夜明てもあり后の月　米耙
比良三上月そ出なから后の月　曽洛
出ましまうこそ都の春なれ　砂文
夏の月むしろに万世ハ出浮れなり　卓老
うつくしき庇見くなり夏の月　篤老
卯の花の垣根ハ月の寝所ハ

此日湖見山下を旅人ハ吟して
通りし

○

面白紀雪ハれとも人の出し　道彦
神雪ハ横に降たり　牧の下　鹿野
もしき雪のうれしきまでに降ぬり　閑樹
初雪ハとなりもわるよ　外　桂　鵜聞
けつ雪や人に暮る　男　山　祥禾
初雪の源に清いいる　都　雪　嵐外
志るしまをと思へハ雪の神　外　吐月
何不りしも浮世へ清くそ雪の道　三津人

傘の下も旅なりく庭の雪　米彦
白妙やそのわすれ立する雪の中　秋峯
雪の松雪に新さまた月夜　圃暁
叢かはやしなりても雪の笠　桐栖
人をまつ垣根や袖にちる小雪　魯隠
大雪になるやゐんてしき叢の家　推巳
毎日の雪なり不なりけり　升六
ひろうをり雪法源山の家二ツ　北濱
雪の戸やゆるしに雪の大鼾　墨樵
出そ浅くい叢の雪かよ雪の笠　葛安
降志きる雪や根源に鳴　鳶　木甫

雪の夜や庵へ行まで月はあり　沂遊
家毎に笠もつ雪の山家　素檗
雪やんで踏かえしまで月夜　藤之
人の踏雪となりけり松の雪　斉関
雪の日にまかせて並し坐山　木仙
降たらぬ雪のうしき残月夜　羊園
はさの雪と雪の月と雪りにけり　為同
世の垢も松さへ付けり月と雪　秋寉
松樹に並えてこそわきに庭の雪　藍岱
雪の日やさくもつれる本松一木　鷺洲
ふる里やおもふさ海ふる外の雪　九魯

まんぐりと踏む雪の小笠ぶ　柳涯
青山や雪の入日のむらうらに　旭宇
志紀過ぐかしき志紀な雪の女　春蟻
天をしまと雪の中を強うな　大阜

○

望山月樹上

老母をいよくたのし松の枝　楳間
我朝の松の親なり志賀の松　一草
松葉ゝ名人の袂やすしの花　万賀
松ハそく月雪樹をなつかしき　少汝
曉まで三東さゆらかり菴の松　千武

清水よりこれ是ハ象新松の新　秋麿
ハ親や松の位ゝ和のつれ也　湖
松当よ松のゝ林の夜開まれし　岐臺
松も寝ゝ居るゝ雲夜の嵐山　得之
行年の木ハ松のゝとれもひかり　春思
家を是ハ象家の松も面かし　啟甫
松千年雀百まで松とりかり　一左
白鷺や九ちとをの松の新　徐英
鳥のやうな人も寝ゝ来よ菴の松　金陵
曙や池一そいのまつの景　左扇
松ハよきこのよ吉年の葉今年の葉　竹有

枇杷園に一朱樹ありさハむかし
仙叟の子の日せられし松にこそ
今ハ幸崎武隈のたしき を
運び花郭公の朝をこうましく
月雪の夕もかしおし美にひかれて
よろしきよりも強んをとゝめてゐる紀
風情ふそ有らるが
老てなしきものとて松ハ見来之　應汀

半未春

枇七郎五上十

き孫こゝ

四月雨に南天の花のうるみ分る　士朗
屋根這ふ青のゐゑぬ柿をつ　竹有
庵の霧山家の人の見たりて　沙鴎
月の光のさやしとする　鹿野
萩の孫る南に海をひかえたり　可竹
棒につかえて戸のあかぬ秋　月底
時雪かけ燈に孫をかけて並　普天
牛も埋るをうり雪ふる　渭丘
うら白のうらをとしとも賣やらん　有

大手ひろけの思詠の　橋　朗
名月にはしも出あるこの　杜　梅葉
夢に夢見る霧の世の中　松双
樫の実のちらもしく寺の庵　野
孫らしうりをかうすをふむ　鴎
炮烽を買ひくをたる船のこの　底
雑のこ君より志らむいあり　松　竹
花ちやき年てゆふふとやしく　朗
三吏奴なから寵君にけり　天
加しきくも法師をとめる女の子　丘
霞鳥子の蔓の鳥の濡　亀　有

おむかふ山にとくはと夢なぐて　松後
辛洲の宮の石積に　刈　巣
手数をそくあくとする川の中　鴎
那分僧の不位譜か　嘩　野
七夕の月をのを大る桐一葉　竹
をとりくに河きく寸なり　平敦
上代のおとゝは鄙に残るとや　天
宗祇の小袖あくまをもをしぬ　丘
菊の香のしつまりかへる坂屋お　杜農
因しくにつまで苗の子かさしに　朗
不二をつんぬ日も一日か二日ゆて　葉

鯛よくと居風呂を呼　後
燈の追くに来る藪の畔　双
やすの塘は寄羅なりけり　底
咲花のきろをふるむ来の風　安
君かけろふの尻自なる草　農

更衣二本ゆふたる草篇　豊州
まさひとつ浮世をへつ茂りが　桂五
茅井にのせて出る屋頂が　松双
山面にすつ来る井のあらしが　可竹

批七部五ノ上十二

かりゐにいつの常ら草のとき　渭丘
松風の一夏寒き尾のとき　杜農
井の子のさふ花ゆひぬく来る　梅葉
やくそくの猫迎しけり瓜の花　松後
卵の花の縄とく塩の面ゆふ　平安
おとゝなれ今朝の雲とはおもはれ　槎雀
橘のさくやくやうにこのをりけり　徐英
面の降りに新茅の茶菖蒲　能々 鼓儿
人の来る大とも花庵の涼が　呂川
さゝをしにすしみの人の帰りける　大巣
杜宇おりしき里のきとまたる　硯静

我親の家にも似たり夜の月　蕉我
月の霜東ハ家てしまの粧かな　英寉
涼しさや月にぬまたる井の宿　柏亭
竹に住人うらやゝ御しきてきぬ　橘老
故き樊筋も山家ハあつまえ　而后
梅落ほ竹にも雲のさいりなり　沙鴎
花けしや山の山里に悪しの音　草人
松風も一息しまり　蟬の声　卓老
己月雨や百合一輪の名誉　珉屋
短夜にかけハ出来たり蛍屋の内　菊兮
唯易き出とふ名の月夜かな　求己

ゆくきぬるもりをの八日殺かな　五雄
魚烟まつやさつきの志賀の松　餘祥
藪ひとつ名ことてゝ多くく水鶏かな　友鳳
青芒卵ける鶏の背や夜ん　松菊
夕白のとなりの家ハ月の家　竹堂
蔵りなり桃栗三年柿八年　金谷
四柱してはや大黒のけしきかな　大商
さゝたまや花も板も雨のをの　駕風
月残月の雲ふ青田くしかな　吐山
涼風をうる人もうる山のおく　士精
山けに学難ぬるをハ蟬の声　得芝

そろくと雨明は春也よ郭公　可玄
湖の水はたとこふやあ川の月　曾洛
雲と見えくゆけハる竜の坂也ゆ　大蘓
涼しさや知らぬくと魚の後　五道
夕皃はせまくもあらぬ夜庭愛　ミカハ 盛呂
井のみは月夜からすの羽かけゆ　、楳老
滝の音我たる生きつくり栗古寺　、木常
花ひらは手を添くくる牡丹ゆ　ミカ 梅香都
鳴水鶏面の井より手ゆ出る　、呑鳥
樹嚙くゆふ夕へハ啼ゆとく絵　、月巣
鳩巳り月の水鶏の歳　沢　、亜碩

日の出る不二のけしきを郭公　、雄途
涼しくきす程をうしはをうれ　如水
鳩は巣を作せて笠を投ゆり　ミカ 介亭
笠ぬくゆ草鞋をとくる　杜宇
鳥の中のうけ出す膳不の所　葛秋
涼風や身からあらる浪の町　士望
山里や夏草をうぬ色もなし　旭宇
なりまり水は月何り啼水鶏　金陵
五月雨を掃出ぬ庵の名ゆ　藍盛
面あしの一筋りや苔の花　應汀
花ほとる椽端へ舟さし入宇　湖風
梅間

柿の芯ハよすがら落て郭しら
三日月ハ塀の隅なり栗右鳥
深とくきに月ハ青葉の下やとり
くふもやすり方を垂れとのかけ源
鳴そうな雲ハ唯たす　杜宇
深しさにさても羅なき操やうが
凄宵まりもつるぬ西日が
春ふかおハ淀のつ稲也　杜宇
五月雨やり蕎くしの西の山
柴の戸やよその蚊を追
若竹ハ春高に整よきなり

三カハ 和楽
、桐屏
九岳
大阜
三ノ 巴圭
鷺洲
珉上
十六 長安
黄山
栗大
三カハ 花春

とのゐに腰をかけうそ郭しら
竹葉形
垣越に三河の山や燕子花
学の根のむすぶ垂とけく清水
さしむかふ身のまとしさよ　蕉庵
行ちかふ船に掛とふ船深し
笠鶴くる洗ひなり夜の月
夕ぞちやへさり形にも杉の月
嘴の垂をとゝきなり蕉の花
卵の花や浮葉のやうな家迄
きのふつんしゐるや今朝鳴るとき

、素葉
よハ 木彦
万賀
呼丈
鵬南
騏上
イセ 亀歯
三カハ 白鷺
ブゼン 路向
三カハ 卓池

田樹にも山うちこゆる生原ぶ　楳洲
撫子によるひやもなし　三千彦

山居

ちつ月に秋しる君そ高のもき　鹿野
秋もなし葉の山の三秋家　秋峯
秋立て山をみんとをるひとりぶ　寉人
秋をつやはし笠に山の底蛇　竹有

学菴

秋もたや月にハ蓮扇の嵐哈　士朗
升高き里より秋ハ立にけり　ミノ良平
秋秋や畠のものゝ小さなつまし　普天

藁の方日くらしハちらやまし　樗康
秋ノや身の飯哈二三日　桂阿
あるきなから萩の花哈ふ雀ぶ　ミカ舐糠
兎角して日数まらぬや萩の花　庇芳
秋の秋のあるかすをて月夜ぶ　永安

甲斐草丸文音

柴の戸を露にふまるゝ小鹿ぶ　草丸

可都里ヶ中をしを三ツ書付中は

やつて背や嵐雪ハ中しゝ家を拡
名月や甚角忘しき松の家
十六年秋や去年をつれてきし山の上

五雄三河の卓池同携し事

一枇杷窓に入風読やあはれ

三吟をはしむ

嘯の鶴永に残る事ふり小　士朗

山陰すしし雲苔のうへ　五雄

茶くゐぬ人を迎ひ箕裏て　卓池

井筒の涯のへる陳もすし　朗

縄すまき中出るる浮の月　雄

廉の帰書のうるき柿の木　池

菱藻乱くとて明引をぬる也　朗

仏志のこゝに素良を離れて　雄

七部五上十七

降夜を老り洞と詠めやり　池

大井蓑に携るうくひもて　朗

暁の花ハさくらと雲にかり　雄

浪のおもひにかゝる月代　池

閑くハ二八の蜜を取出なる　朗

いともりし志き五位の公鬘　仝

年の名残風ハいつをの風なり　池

箕をかゝりけり雪の市中　雄

日くにかくこの夢を背に負て　朗

姉歯の松に何をとふらん　池

うたりなる林を火に見る雲鶴の足　雄

紫の明家　砂川乃砂　朗
かしもなき峯をのをなる脇の上　池
先ををらせ紫夜の法論　雄
うえす　楞　樟子の穴へ突出て　朗
素子可しとをる　魚のさせ云　池
鵜とくうちさへ人の志のいしく　雄
小鹿の戸本も科ハありけり　朗
夜の寅の鳴かをらぬか月の雪　池
丁か来しとなす　鳴まけりする　雄
風流ハひとるまとのと捨まきし　朗
手も法事らせぬ雅会のぬりたて　池

卓池三河にかへ家

文化八辛未仲秋

枇七郎五上十九

蓑虫集序

薩摩諸虫なる琴州の初秋の夕ハ木やとの濃に住丁やくれて来つゝん予が艸扉に行蔵をなるハ蓑峰月の七日なりけり何となく胸うち嬉しかるやうに覚へこゝいそき罵きこゝるに遊ばる名誉月廿日宮巴帥まりりぬと告志をたるなりこの事しくて難く隙だ糸なし渺ありて思ふに花の色行有る黒姑枝をなくして巴子が掬島機に以陀結袋をおゐ機鳥といふ集作りたるも

今ハむし

冬の鶯るむしろにをする苔の分　竹有
木の葉ふかうに寒ふたつ寄　士朗
さまくの雪の寝に来る木をもて　岳洛
薄七株三日月の　月　楳間
秋ハまくむしろも一重の名こそり　方明
ぬかいなくしてをとる川上　国水
松の木にこそ雨をて馬の縁とり　朗
ほのくしとなる雨を咲ぬる　有
閨の戸をむさいに叩く朝朗　間

枇七郎五上廿

いまかしこ照ほる実かたしこ色　洛
萍を橋の阿ちらへ吹清け寄　水
蓋の蛍の這ふかけも有し　明
雲きりハ月のくしきをくハる色　有
ちのきぬたそ阿ハ生なりくしる　朗
碓井の鳥ハいつてもうそ寒く　洛
駕篭にのりても笛ハ故さに　間
徒に新さに花のひとかまへ　明
葉鏡にくまる幽菴か夷　水
鶯ハ何になまとく鳴のうす　朗
まこ往てもアぬ天のかくし山　有

筒井筒井つての石の苔むすを　間
朝日うけたる手の窟の飯　格
兜巾きぬ人ハひとりもなかりけり　水
箕の頭らしき宮をとちたり　明
うき旅にきくあらしの里古寺　有
ふゝ構換し灰を拾すれ　朗
西りに討ちハ重たる鉄もわりて　格
洋になりけり西の稲つま　間
丁一羽五百に賣てにはるなり　明
菊亭とのく柳ちり出ほ　水
あ沒も二階住居ハ却もしつく　朗

三日森たるまハこゝろぬ腸拾　有
八重霧雲雀鳴なる夕くまに　間
大かた花も咲そろひけり　格
一柱無ゝ茶の鳥ひにこゝす　水
泪六人恵　西　を　けふ　明

尾張に来ませやうてまゐらんと
屈くせし人の文をとり出す
こゝ来泪ハどくまらさりけり
いひ甲斐もなき世にあらり枯尾花　月底
猿に淋しき紙衣の袖　永安

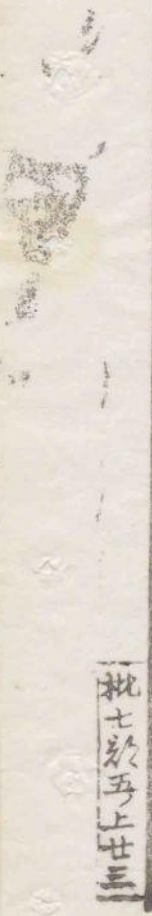
さらくと洲にのる鳥を押出して　沙鴎
ものくすくしも月にあらしり　谷卧
栗飯を焚ハ誰やら覗くし　烏旭
鏑をけたる脚さしの　寂　すゝ
ひとつらに阿らしの菓のうつ蓬　東功
蒸をくゝぬる宵の蟾牛　宇仙
免に角にかくりの郭つゝ　青峰
わきもむかしぬ蓑輪笠鴻　底
餅くまし餅屋の祖父ハ仙君　安
おしをしまる心の亂尾菓　鴎
阿らし夜の暇をかしたる月の新　臥

批七部五上廿三

雁ハ黒田の鳥に成りしり　旭
うそ寒き手紙ハ人　く
雲の西日の蟹を乾かし　陽
ある花の白ひを雲に吹かし　仙
筆の絵にる雲のすほかし　涼

悼

冬籠さつまの魚より吹白仗　ヨリ　岳格
春をのゝ吹をてけぬ時鳥　ナハ　長安
菊枯寄白きに厭る霜の下　立蘇
春思ひこのくも分に忘む秋の霜　扇巴



何れ生きハまのゝあらず萩の家　五凡
落るとも雲ハのおして二日の月　岚交
花のつゝら山に入日を雲のこね　津凡
西日はす塚をこつ見る暑ゝ分　里桐
月やおもふ塩根何くりの虫の石　素玉
無言にてをれハ啼出ほきりは　民暁
まくの秋のけいきも何らなから　蘇人
蓮をまくらく尾花の中の気絵　天竜
秋の日の淋しきものを紙の下衣　西滸
り秋の是をかゝこゝ塚のから　岱明
手向ゝやしくれにぬ出し　枕屋花　蘇涓

粗こなくなりけり風の楢の家　林志
菊の花洞なからに手向けり　椎長
絵のヨクまの粗もとまて
時鳥菴のこゝハなくなりぬれ　巴水
初秋やその俳を茶の家　只冬
こしゝ東の空け月となかめけり　蟻堂
次の夏へ出ても眼にしむ蚊蚉　よし
短夜の洞蓑ともうつくとも　かき
秀さゝろ鳴蝶よりもまさりけり　つる
居磐てもく暑きなこゝろ　ちよ

初七日

蠍暑しよれとさつまと答達　琴州

竜逐まるらをて

暫し山中のうち家も竜多り

四十九日

秋深き松を粉や法の夢

掬島樹日記

学の戸の家は留まり唐達　玉屑

冬籠人のくまてる来自し　巴水

松新をたよる夕や月深し　岱明

けしろやするゆるすゆ菓の花　信　芋竜

忘れても菓は笑も学の家　慶　百兒

はふもく蕉の寒いり蠍手　蕉芳

七夕のうるる底白し成はけり　一萍

今は羽をふる紅碌らん蝶の春　ブセン　ち玉

ちかぐと日の底雲き深雪かな　三雄

ほめくと蠍のそはまを河西ふり　瑚璉

雪の松又夕くまをうんはけん　推長

手引く行や一京枯尾花　士英

小山田はたいや夕アの丁一羽　丁々

枯芦の日かな一日ふかまはり　斗南

新田の松かくろむそ胡蝶　五行

秣門仮寐の夜の樵をしし　鳥旭

きりくに身をかくしてゆゑ
樗は森くく父母こゝる蔵所が
ほゝくと砂の嵩るく杖の風
鳥ともの氣を蓋ふも梅の花
山形は日ハまて月の山家が
菜の花や小笠ハ淡き山から
杖の雲夜明の名は淡きなり
丁の雲ひとゝくは鐘う明
生垣ハ朱なり人は浮かへる
杉ゆやうな日和のつゝく桜が
雉子鳴けハ鶴て鐘なる玉ゝ鳥が

天郎 維石
コハリ 秀子
下天 羅風
浪也 竹女
コハリ 鹿野
近江 千影
杏坡
肥ゴ 文暁
浪竜 尺芝
火君 南明
手 柳荘

数やり火をおもふそうは何ふきは
東岡州まハ東懐へきりくに
白雲鶴の雲もの多き小家が
木地ひきの子なうつに木下ゝ青
名月ハ何の菩を多き月取が
桐火桶にさうら垣ハしゝまにけり
雑穀の花の何まりを鳴まてめ
ゑる月の家を大集きをぬ樗火が
五唯やあらく此何け鳴ふ鳥
さりとてハ能て氣之年の雪
梅の花春に不足なりけり

スハリ 由肆
浪速 千坊
越中 竹老
コハリ 素剛
シハリ 大商
加賀 眉山
河内 来耗
春波
シハリ 大阜
、 棋道
ユ河 梅堂

古猫や去、葛ゟ原にたるの寄
根引して植たき雪の小松ゟ
木隠て落葉かくなり孫冥妻
すしさや手に松脂のつく夕戸
いつゟ咲いつゟ咲らん苔の花
松の雨穂夢隆としてやゝ降り
去来本山ハ鞍馬ゟ時 鳥
陽炎やけなりい津戸の土なふり
名月の空を寂よと唱 鴎
冬の日やつらく水のよをてる
何時を雪つむ家の飯けふり

浪花 三津人
鷺耕
ヲハリ 有磯
洛 蒼虬
ヲハリ 左琴
ヲハリ 卧央
、金谷
、舎童
浪花 奇渕
淳石
江戸 李臺

梅柳にふハ落葉のさかりゟ
家ニ有ハ人の来よいゟ梅の花
霧ハ世の人の重石を山ゟつく
名月や雨も月の後のうらにしき
館まをも霧かくりて靜なり
雪をたらす雀も追に火をたかに
東の明て見ゆハ時雨の山を来し
幾人も旅人とする柳ゟ
家の来ハをりく外の雪ゟ
七夕の月夜ハ霧をかくしけり
夕くれをあはへてこそ啼蛙

ヲハリ 駕尾
、沙鴎
、浦且
飛々 左
碧山
ヲハリ 五雄
、岷江
浪花 升六
肥後 綺石
ヲハリ 岳輅
、すゝ

蓮入まて咲たや井手の山の花　信濃 雲帯

拂ふく川押鋪に住居る　其應

鶯やこの笹ゆけハ叢小路　三河 住雄

人声の月をふくゝて枯蘆し　尾張 国水

朝かほくまゝの初漆の根深汁　、昨来

月の夜の無数寺ありて秋の風　、菊人

七夕にうろゝ入出羽湯茅の　出雲 花叔

鶯や二十四橋のたそかれ　尾張 九岳

太鼓うつく村に立けり雲の峯　、家井

廿日過き月の侘まて住みなり　浪花 萬和

山の夜の風のこりけり庵の中　其道

桃七叙五上廿七

ほとゝきす波の音や夏木立　大津 駟道

秋の子とんぼとの采女より　尾張 杢也

月の出を二人まちりし簾竹　、黄山

明る嵯峨の尾を曳くきまて　飛驒 怡亭

猫の子二足三足ぞ初しぐれ　甲斐 可都里

たまく日ハ出ましも八重霞　雲羅

別るゝと思へハ寒しけふの雨　尾張 桂五

まう日の雪ても雪の山家かな　、永安

一輪ハ露にうるく川田かな　洛 茂良

行秋の寺をたく窓を訪なり　尾張 武草

小松の雪いつまでも山鳩を榎樹ぞ　大津 玉来

動かぬハ何おそろし冬の雲
白雲も移りて冬の雲川かな
正直な松の何よするの　西
手よりハ乳まくなをのそ荷蔵
山人ハ鶴といふなり周古魚
冬の鶴樹をきらひに人が来る
降きのく寒おもしろし枯葉花
志らるゝやあふ良ハいろくの山の隙
志の事を魚も鳴らん神樹
絵緯の寒かまて枯くの薄かり
う見忘く深其し雪の霄何とし

ハタ 吾来
尾張 春臺
尾張 野乗
、月底
ミノ 千阿
ヲハリ 朱月
、吐山
イセ 不卜
信 希言
ヲハリ 百樹
、松菊

紅樹に鶯ふたつ来て帰ぬ
余波なき春や雲に燒ならぬ
小西そふ茅の中の何らしか
雲によりハ菓のふく春や蕎の西
花の弥生一日むのかくもかな
枯尾花家頗ひの恥　しき
子のやう小蝶をこてをる一人ゆ
菜の花や春かしわる鶯かしら
何にたとへんそも水無月の松の風
来もすかし笘の家や霧時　西
枯し雲に唐森かしの垣ぬかな

、天老
浪花 魯隠
五嶺
三河 和楽
江戸 完来
ヲハリ 騏六
、亀六
洛 六嚮
ガイ 巣居
免雪
ヲハリ 阿城

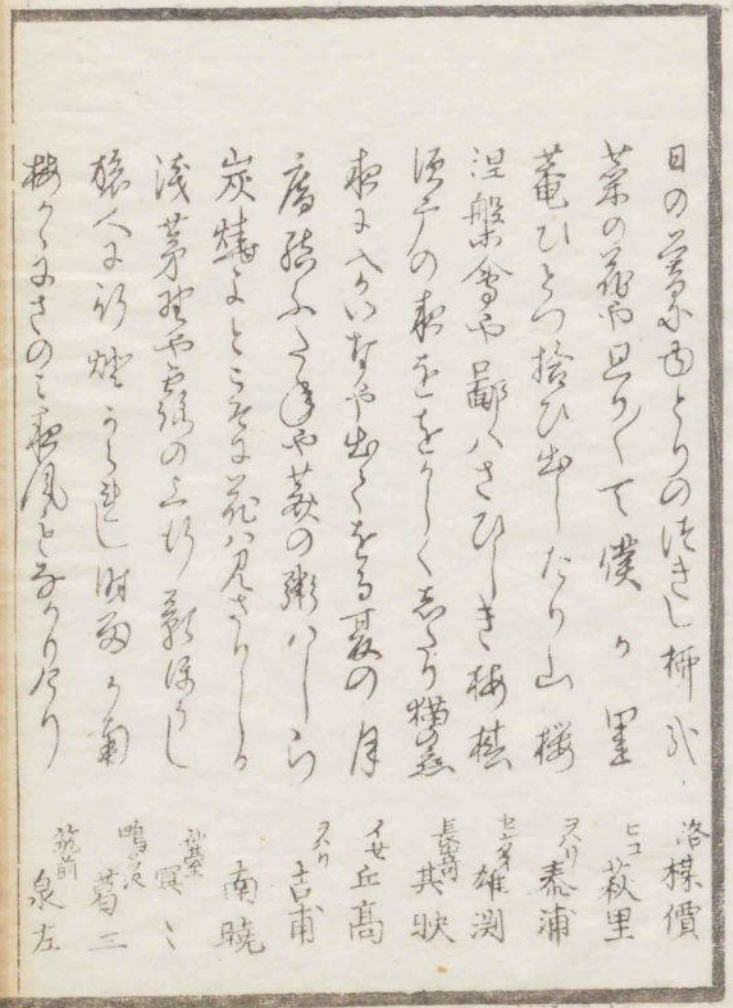
臘梅に似たるすがた 新柳 、呂柏
冬の雪雲なき山を出にけり 浪花 貫風
松かけや蝿にかゝる椅 笠 イセ 椿堂
于底や旭のすやき 暁か 黒 遠江 素棋
一日のけしきをはるや 鴨の 蕉 下賀 李暁
咲ほのや其の蕉より雲記る 立而
大仙のかゝるのくるりを其の風 長崎 吾友
蕉より 安きものか胡蝶の心かな ヲハリ 我丈
花のちる枝ハよりとて 月夜外 、圃暁
枯風の見えそめにけり 釣 葱 、竜舎
月雪や師走ことなき天王寺 、對我

批七 郊五ノ上 廿九

魂棚の外に灯の なきけり 家外 、棋間
何もかをこゝ蕭くさし 牡の面 江戸 こちき
さてしさの扉に 所なる夜明外 三ツ 普天
鶴の巣かゝ雪の 鳴所たり 宇治 在中
枯おかし 猿の根子も一夜つく 下総 太錦
棋か香にこゝ志ぬ 岩の朝日外 一章
元日やとも 花咲山の 形 信濃 嵐外
なしこゝ能とのハ 茶子愛 尾張 硯静
り人に 顔のかゝる 峠 かゝ 、謙高
むまりなる 雨降こゝる 田ゆし外 喰花 瑞馬
後ハなくことのか 遊ゝ 堪 洛 月居

鐘の乳のほのくらえて時雪
霰あり尾上の松の日くもなる
宮明て雪の行える　旦　小
美果の省ゆとしるる月日かな
青雲を鳴もたかさは虫の夢
東柳の新ふむ道と東まなり
東明ても蚊のなく町や稲の花
墨るるほとよきはふの月のみ
家すゝは梅のふけたる戸口かな
十年も同し顔なり鉢　叩
おもへとく甚咲草もまりなり

浪花　米彦
二長
鳥功
ヲハリ　少汝
、冠市
越ゴ　喜年
シナノ　素檗
可立
下ノ関　憐霞
ヲハリ　盧橘
江戸　よし周



日の雪ふ西とりのはきし柳　武
菜の花や旦りくて僕ゝ里
菴ひとつ捨ひ出しなり山樹
涅槃會や鄙ハさひしき梅桂
酒戸の東ををかしくしたり横蕪
東ハ入かいなや出くをる夏の月
唐詩ふくきや萩の粥ハしら
炭焼よとこそは花ハ見さりしか
淺茅殿や霞の上の新ほかし
旅人は行燈うらしし時雨ゝ雨
梅かくはさのこ東風となりなり

洛　楳價
ヒコ　萩里
ヲハリ　泰浦
セヽタ　雄渕
長崎　其映
イセ　丘高
ヲハリ　吉甫
南曉
秋墨　冥々
鴨ノ沢　葛三
筑前　泉左

草硯捨る日ハなし萩　廿七　ミノ 自牧

鹿の音の哀をさそふ浦に鳥かな　アハ 萍泊

子鳥鳴水の面や富士の　新　ヲハリ 可青

夜さむけく鳥か帰る冬の月　、都暁

川へ鳴く霧秋ふけり山家かな　、暁吾

竹稲りの窓さく寒さの秋かな　アキ 玄蛙

穀わけや茶子つつ手の影月秋　クマノ 文角

鳴ひらすいきまの宵電るかな　兵庫 一草

春の山岡しさすかハ……ぬなり　ヒコ 岫九

白露の落るくまほこ……　芦 春蛾

すゝしさや……　ヲハリ 竹思

涼しさの床をも寄る……けり　浪花 春思

源の月けふの秋の……　明石 蝸国

月白て雲ハ消る……生海鼠かな　ヲハリ 谷卧

廉の……　、佳楽

湖……朧月秋ハ富も　ふる　、野喬

黒谷ハよい名なりけりときに　洛 琢李

合歓の花塘へ出る日ハ高し　飛騨 儲史

白菊の始も白く始まくらな　ヒコ 對竹

……竹の宿　ハカタ 歸来

冬の雨……窓の……けり　ミハ 大巣

大……ふく窓の小柴垣　、宇仙

墨人に當ちきといふ事なり
何時ていふ雨の野内のほし
蚊の夢のゆくすてゐき雨要分
山鳥の屋にこゝ事なり書の雨
當や一ちん越の大井川
所く書空出来て梅の花
三音理や雪の筆ハ扱ひし
鳥鳴く夢の歌風志つまりぬ
十六夜の雪ハ芒にかく事なり
梅ゝ雪や鳥袋をとゞせる蜑ゝ垣
水の音ハ聞ても絶ぬし小田の丁

長キ 菊也
ヲ下 于當
つる
イセ 推巳
ヲハリ 秋峯
ヲハリ 麥阿
、東陽
肥ゴ 巴人
ヲハリ 蕊ゝ
、士竜
大ツ 烏頂

亦兎に以中きせくり 鉢 叩
うつくしく形きハ蘇なり 芥子の花
つ花に山をなしてゝ冬の 月
おもしろや發の暇くふ書の風
いつの世のたゞきを 軒を結 菫草
時雨り 後志つゝ有り 湖の面
時雪雨ハこゝちんの世界 かな
門守の淒くものゝさく 紫分
月古し橋になく虫をしり 本
此月や小松の中に 芒ゝ つゝ
夏 新月 ゆきくしと山を出るなり

三河 卓池
ヲハリ 大蘇
長崎 鞍風
越後 岐東
伊勢 翠川
尾張 青磯
平松 亜溪
江戸 果兆
ヲハリ 素仙
大津 宇洋

なさこそ見ハ萩に嵐の頃をなし
なふすてハ雨まもなくす山さくら
枕風や白いなくへぬる泊馬
むく鶴に鳩を鳴む柳 うかり
美ものに入業こゝろ也し涅槃 分
連歌岸まもよくは春の月
春の歌や寒覚の月ハ何所へ出る
時雨るや春きへ夏さへ外の夏
ち秋ハいやでも春をよ葛の花
岸の火に手をもむ春あつく小
象物を五尺をあまて好 蛍

一松 里桐
浪花 麥太
尾張 其幽
洛 文左
立蘇
信濃 蕉雨
甲斐 漫く
奥 曰人
ちよ
よし

蛍や夜なくへ来る 春 夏
高笑さは事やしら雪の鉢印
春の歌に猫ぬきまるく塩ぬ
力なや秋になるよりこの忘也
歌ハ更にはり壁の一重の鴨の声
くまくる日の一時より時雨はり
行春や梅うち匂ふ甲斐伝 漆
捨ひとき世に何りなから 山櫻
石川や石ハ根つよし 五月 雨
蚊屋 うさぬ歌そたのしんの鷺
世忘まにはしり入はり春 芒

尾州 閑樹
、女 翠山
近江 砂文
江戸 成美
ヲハリ 野秀
肥後 栢堂
、 眠石
尾張 士朗
几翠
民暁
仙臺 乙二

雪くもにすまれぬふ月の光かな　尾張 方明
志つかきの菊のよなる日和かな　肥後 樗雲
鶯やなきく木くの枝梅しり　和水
星てるや笹葉の露の散まれ　琴州
森茶くも松のよなり冬の月　西滸
七種や学の中にも梅の花　尾ハリ 五道
我宿の葵ハ人につまれけり　、白之
東雲にさえしミのつく蛍かな　近江 芳之
戸口さへ河ハ石なり菊の花　肥コ 夢白
燕来て昭けハ売る学鞋かな　イセ 孔阜
秋尾の戸にたさまるて小つまかな　ヲハリ 徐英

しくるしやこつか斗の雪の川　イセ 李東
そまに形に焼くゐる蕉のまゝかな　推長
舟つなくおの子ハ黒し秋の風　青梁
夕きりや取くの魚市　ヲハリ 櫻
宿かりて時雨の名をたゞ居り　遠州 木南
月雪もうぬ木兎のすゝこかな　尾張 壺屋
蛇の巣のふかまて来たり初時雨　、呼寂
月影の外にもかくる夜雨かな　肥コ 兎毛
何書て見くも沸しき園扇かな　ヲハリ 竹有
戸明まハ茶ようのる住居かな　只冬
咲神く暫くの名を芥子の花　筑後 其成

[illegible]とかきハ山家の梅のちる日ハ
雪の横るやうに咲し菴の梅
葉作うり大仏前に体をかくり
り枝や何をかくすの姫さつ二ツ
初丁やとまを見えし筑波山
沸しさや枝の蜀の星の亀
ましら啼山へも遠し宋古雪
杖寂し蝶ものいはぬ森もやうに
父母の顔見はりん年のくれ
照る月にくへかきてちる樣ハ

遠州 素棋
ヲハリ 斗石
、朝蒲
、周瑞
、つかき
、都舩
浪花 虹宗
クルメ 双鳥
ヲハリ 元美
イヨ 樗堂

父の髪白のこのくをし母古のうらに
のぢりたるをかくしけなくも嬉しくも
覚えたく春来にかき記しぬ
鶯の事を鳴ぬ日ハなかりけり
素をもし鹿の鳴に鳴かれ
元日やむかしなからの山杉数
何家をこなひとつ祢ハ像
来もすから春の雪の蜀の
沖の漸ハ鴎にしたむ沙干ハ
り素をせるをしまん今も
今朝これハ古ろ都し山樣

陣や名ハ惜まるゝものよ 素の爲
葉の毛をこゝろや眠や松の 新
素爲や鶏の尾を引 芋のこと
爲ひとり風ゆきものゝ素の爲
小雪ふる日に見たしけり初桜
爲新に押るゝ 沢の蛙 ゝ爲
松の蔵爲並 花をも 平年
むら雀 素の作山 唱 雲し
自雲をと 殺並たり 夏の月
戸明並ハ 新ハ 蔵の 茶 茶
主ハ誰を 素岡の中の一ツ爲

日雲る 秋ハ 秋のむしよりを明るさ
かくてゝしを月ハ 雲なり 背 情
短かしといふ 秋ハ 空の 黒 有り
何もなき 花なりけり 風 蕭る
なり 雨や 海ハ 海とて 洛ひる
きのふけふ 爲鶏 唱 爲に 泊りけり
けしの 毛 爲つくるなら 白ふ 花
爲 鹿にとしけ 浮巣の 雛の 夢
先たのむ 物のひとつを 栗の 花
人里の 遠くも 行ら 江 黒 古 爲
大空ハ 何かなにやら 時 爲

枯風の吟暮しくり水の杉
夕月ハ鶯にあるまも面ゆし
出るうれ是ハ只啄木のひとつが
朝良やとありの雨も咲交り
交るかと誦ゑ入なり鶯の月
早稲の香の樹にかすふ音が
何ことも誠なりなりなふの月
きもちく江杉戸押へて章なり
夕くれにまとまる杖のわかが
人に付くく萩の中ことも通りけ
朝霧をうけて英雲の天キが

枇七郎五上三十七

降出さぬ先ならず沸し杖の雨
枯風や柳の細をこえがくれ
絶えに軍てそよなれ小夜碪
人寄の床しきし塔の月ゑが
廉をし鳴丁も鳴なり塔の月
枯柳京蔵かつらの粉凄し
乾流る洋との流れよ鳴子鳴
世をと廣くなることを冬籠
丁くれ〳〵萩のかれる　音
とれ焚と薄かなくるまゝが
冬枯や菴ハ木葉に埋れて

宮巴ハ紙上の舊本後也或我
の由見に殊筆殊まりきり立人
所望多き登以へハ宮巴光古多へ
可榻下の應接佐須女取蕪也
左氏後 夢表面照我人
筆小見し殆の狼路に
行人を

朱樹禹人
士朗

批七級五ノ上三十八

泣瓢集

地雲陰士東し 故路 京ゝの
婦久遇を愛寸 忘憂拾蕪
に用留にを所ら江多く
常に曾のふく魚 小し
古路かり 起ふ 神に
むかふ時 鞨鞍とし
ゆとけをかまとき は
末魚とは所るとき 苟き
人のその婦く魚 何に
我多き能を繼ハ大法に

南氣出し家周辞しけれ
そもより今にこそ傳へて
なき婦久屋といふ妻宮の
木の枝にこそ加年さりけれは
あしまし出て枝にこそ龍蛇ふ
出出こそ赤くひ色もす秋
をかうなとは
なし　岩

枇七郎五上三十九

母義の陽をする麓　大阜
東ハ松の春し殊に宮の宮　北雲
鶴の都の山の春に誘ふ花　墨山
松のすそうの鉢なりけり　彭朔
名清しさろうるおの栖して　周秋
ことの都に捨し　四鉢　阜
雜談のすしまる雨の降迷　雲
すしにこの童髮蕊の蕊　山
石とりの道残存する所ろ畠　朔
男にくしと涵買に曲く　秋

約束ハ多馬ありし夕に寄　阜
二日の日かゝり月の相　宿　雲
むすといふ人ハ疎させ寄せ居　山
白菓をかり菓の花　咲　朔
浦流にかゝる浪のまま廂　秋
そふらさけて錫ほきこし　阜
玉鉾の宮こはるゝハ重桜　雲
鶏鳴合をる聲の長寄き　山
誰やらか睡に似たる兄も学　朔
泣寄をよる常陸常うり　秋
たゞ寄り来て寄る屋根ハ藻の茅枕　阜

枇七郎五ノ上巳十

雨まもるゝに雲のむらう　元　雲
ほとゝきに阿濃の墨に極り来て　山
早乙女うたふ小田の吉日　朔
棟上の鮮をいらまくつかの羽　秋
西天の鶴をわとく　阻　板　阜
金雲の無形手打一代しき　雲
朝風しなる列水の月　山
幣とる石の底のうつくしき　朔
世つき偽し伊達の云郎　秋
梁のむくき一男の古禊　阜
豆板むほして人目をくらん　雲

この頃の情おしも初里一箱　山
いつまで唯き花の夕ぐる　朔
連葉をたき火うつろふ嵯峨の所　安
親子つれめの五器を打あふ　阜

大阜　八
兆雲　七
墨山　七
彭朔　七
甬安　七

枇七郎五ノ上四十

大阜尾張に帰るを
とし名て

一日は山籠りをん春の　雨　卓池
春き柳の兼ふきけらき　大阜
いまつらに鳴鶯の恋り来て　岱呂
柴の今ふりのくる　晴　立　池
高やくと鶴柿の乾く彩の月　阜
うらを左に霧の見晴し　呂
鐘つきのこ絵んと起て枯の風　池
女なりけり　曉　の　春　阜
寐取から学難を出て出るを　呂

[illegible]と[illegible]に[illegible]を知[illegible]や　池
灌佛は海充をくひ[illegible]　阜
砂[illegible]よをて日[illegible]る　朝[illegible]　呂
月[illegible]りとちいさき[illegible]　池
[illegible]は[illegible]を[illegible]のちく〳〵と[illegible]く　阜
幾たひかき[illegible]て八[illegible]ふ[illegible]子　綱　呂
[illegible]はさし根の[illegible]る関の戸　池
[illegible]花は[illegible]のとく枝[illegible]　阜
[illegible]なこて[illegible]へ[illegible]天津[illegible]　呂
[illegible]け[illegible]ふは[illegible]風を[illegible]　池
[illegible]ふと[illegible]て[illegible]ふ朝の[illegible]　阜

枇七郎五上四十三

[illegible]は[illegible]をさへつる[illegible]　呂
山[illegible]花をりて[illegible]　池
[illegible]の[illegible]は[illegible]　阜
小[illegible]の[illegible]の[illegible]　呂
[illegible]は[illegible]の[illegible]　池
[illegible]の[illegible]を[illegible]る[illegible]の　阜
[illegible]の[illegible]て[illegible]も[illegible]　呂
六月[illegible]し[illegible]の　池
[illegible]は[illegible]を[illegible]る刀　研　阜
[illegible]人の[illegible]る[illegible]の　呂
[illegible]を花の[illegible]に[illegible]し[illegible]へ　池

加ふるを志ける数のたえ口　阜
本代はやふんなき舞とりて　呂
張籠をとけに蓑もたまふを　池
こよしの〻春秋の夏の雨の音　阜
古きよしこをかしる　呉竹　呂

卓池　十二
大阜　十二
岱呂　十二

枇七郎五上四十三

かふもまつ身を無縁の陰をし　大阜
蛍のうすしく苔の　一雨　秋峯
所来紅四不求をえて蔵るや　士朗
月のたよりの清を隔てる　阜
鳴明をつきまて居し枯の風　峯
なるむの音の　まゝ　は　朗
いをかひの縄をかしき甲斐綾河　阜
り燈をりて一疎入を　る　峯
夕如の若尻きしひに消りけ　朗
萩の花をかきは　嘆つきし　阜

巣にすめるは巣の傾き出れ鶴　峯
二日遁れる二毋の麦糠　朗
露霜の紅葉も多く殘る月　阜
安り須臾つの鳴し荻　時　峯
沸しさ月麻の色たる芒の穂　朗
簑も鐙もまちち交りけり　阜
津やくとさし登る日を蒸の蒸　峯
柳の枝をことにふしまて　朗
海鬢海る星も出しき京極　阜
馬にめしる人おもひそ多　朗
夜さきに十日たかりも掛くはれ　阜

批七級五十四十四

蔓草の遠ふ関の入口　朗
象珂りてもとふなし憚の君　阜
鴈ハくらく崔さいし　朗
朝鮮の東唱の雲の積さて　阜
月ハたるものをのしや人々　朗
和とくせ我横重ねる橋の穂に　阜
秋ハたそこの橋なりけり　朗
かゝ屁も駅に沼津の波の高　阜
蛸一本のあしに　唫あく　朗
堂宿に庭をもとめて罰珂なり　阜
ふとんの端を寄りつけり　朗

笛持ちて立ちしたる童　雛　阜
竹の秋風花の書　うを　鹿野
美代のめくる小口ハ梅若菜　阜
角まで以てしく墨の　霧　仝

大阜　十六
秋峯　六
士朗　十三
鹿野　一

枇七郎五上四十五

木隱の名ハなかりけり桜の月　沙鴎
あやうくと霧の上風　大阜
蒸雲に舟の花匂や祝ふらん　月底
行をおくらせて書　靜　明る　岱雲
雲竿の四尺五尺と告て書る　竹有
以陣か朝日の匂ふ人あり　雨耕
草雞の高井木源く箱消て　阜
よしの葉を結ふ梅か兵　鴎
いき同ふる霧人の袖の薄霞　底
芝新に海苔の浮鷺か夕飯　有

仏帰ふ日ハ摺山木ゟ新しき　不物
蔓をつるまく井戸の葬　務安
異井の月衾有り馬の蓋　吳山
老かきぬたの手聲りに折　雲
御香物小腰をふとす住別て　卓老
生にかゝるを居る　元　日　埜山
一天の喜きを花と笑ふ花あり　庭
まゝ遊席しき仲磨の夏　阜
下京の客ハ高瀬のとゝり　有
小六うしふて泣出しにけり　而石
微雨ふる蛍の闇に月を覚し　鴎

穀蛍ハ穀をとしよりの　金樵
萱堂ハ水の墓京のたつまかし　阜
水をに追まて不拾ふらん　充
裏の手の先ふそそまなる一穀　有
御盃ゟ口に引ひ　鵜
風月の旬ふ柳を折撓め　樵
すらく水の菓に花もの　庭
拂おまと鳴ゟ三河のきゝ　閑
双六うちにおをひ出まる　鴎
炬さしの梨らそひをおまね　雲
鷺に位のそもくをきく　樵

お社宮司の河川に細に草をきめ
松のおほかハよき勝り菊
川上の柳に花の香を添へ
志はしとてさそ立と多り八年し　居
閑
老
吳

沙鴎　四　鴉聞　二　大阜　四
吳山　二　月底　四　卓老　三
岱雲　三　楚山　一　竹有　四
雨耕　一　金蕉　三　不持　二

枇七郎五ノ上四十七

浪蕉昔越日　千数季于茲
薙髪留其地　郷人遂建碑
翁の石の面にハ髪塚なりの
方に
押よをて　おもしさ　葉咲九月　大阜
隣を浦と見る　松のしつかに　魯隠
天雅のうけ給ふ日記出　掾て　鵞雪
杜園と解　河ゑ　板の写　長政
まつ　所をすとんと井戸へ取落　黒
旭も　お祢こも　裾にまつ　ハ是　雪
命うして　予是ハ　居きぬ　在　取志　政

何をうとゝの風さはくらん　隠
何ゝ時ハおもひよまけて寒ゝるも　雪
蚊の扇をまゝる夕　良の花　夜
晴ゝもおもその鶴をきゝはせ　隠
おもしゝは入笑の杉や　舟　雪
秋の月かゝやく中さし登り　夜
鶉とゝへはゆりく上臈　庇　隠
聖の文の面にも海さる霧をて　雪
かよはき枝は八重の花　咲　夜
老ぬ生ハうれき事もかゝまゝり　隠
梅ゝらゝ啄く馬のちくめ　紀　雪

面壁の白なさし葉の蔵かゝ里　夜
かゝのよしのゝ雪の山ぬ　隠
向佩は蓬厳原の前なへて　雪
書ゝ洋ゝひ責るらしのれ　夜
それ紙は手習ふまゝさうち隠　隠
世をうち川は浩ゝ間引菜　雪
酔ゆさる　笑屋の上の三日の月　夜
氣なゝしの柳子ゝ花出る　隠
いくとせを猿は中ゝ生て軍のゝるさ　雪
玉のやうなる　ほゝくきをうか　夜
經本の国さ御し草をうち　隠

ほつかくと市かたし海　雪
砂道は家雑の車たしなめを　亥
浦海をいくしく浦の年　寄　隠
のむとりせ日のさし光る海のよ　雪
あとくしと胡おとはなく　亥
積蓋の花の白かりの源なきハ　阜
つきを角くむ浪兼津の芦　仝

大阜　三　魯隠　十一
鵞雪　十一　長亥　十一

枇七郎五上四十九

むら鳥の守山をし夕　時雨　観静
馬のふり色はさまく枯　芦　大阜
新治のお風しをつくむ穴城て　大巣
十目の汐のそやき　豆　飯　呂川
まち並ふ榎の身のはりも通　周瑞
萩そし冠を落を　ふ風　静
ふら露は夢を攘るう秋の塚　阜
古墓つくるおしも　神　垣　巣
神の事は糠さくくまぬ木下闇　川
罌粟たしよせて　稼　おもしも　瑞

いつはりの人はゆくしとふり向て　野喬
小所の塚にうきを語るゝ　圃暁
さやけきは月はかりなる恋の刻　静
虫にはつけし林の枝折　戸　阜
岩をしる紫明の鴨の蔵　巣
おかん日和に鶯る雲とり　穹
多賀をしやうし寄の松花の風　川
連奇はみとり素は茅　餘　静
はらゝ家に扶持下さるゝは村で　阜
降つくしたる雪の氣　月　巣
浪よする香良浜の家にたく解　静

批七級五ノ上五十

紀の路へ行ゝ五位の一群　川
うゝ隅に月のいたりを泣申　巣
しらみに鬢る袖の多く字摺　暁
それそとは誰ゝ定れ花ゝつゝ　瑞
夕暮をやき髪の消かしく　静
木兎をみる鶏の色まはり　川
豆腐よひこむ大寺の　巣
三日月は月のはし兎と柳　蓉　草
勘解由ゝ曲るを不稲の芳口　瑞
廉威を弓は折をも面白き　静
ふるての紋のちさき　山里　川

乙の子をほしかる方へまゐらせて
あるも書き唯有のし　　巣
こき宗く花の頃こむ絵の具皿　　阜
水よりけろふ手種をくさ　　瑞
　　静

硯静　八　周瑞　五
大阜　五　野喬　二
大巣　七　圃暁　三
呂川　六

批七紙五　上五十一

ある日老翁を匪んとふたり
まゐて訪ふ翁有り
話して笑顔といふ
[illegible]
鯛葉てふく葉て顔を提て　　士朗
月の滴りしき紅の唐からし　　大鶴
[illegible]　　海翁
鶯活くとふけて壺山の杖を告　　朗
[illegible]　　鶴
　　海

文化八年辛未　猶月

玉兎集序

枇杷園にたわれたる騷人
墨客の序に對して枇山の
にしきを思ひ又ハむかし
今秋詠まし事に筆を

是らをて匂をいひ以て爲るを
梅葉手早くも取ゆつ見て
玉兎と稱名津にる踈藪横
斜ゆゑ月と梅とのむつひ
よりいとおく

梅間

王兎集

○郊卯の屋を見んと席を出て行ふと
二里斗かくて是をの道を志らは松の木
陰のいと細き兎なとの西絵ならんかと
おもふ斗の道をたしくしは霧の高く結
つ来なる道しつ家ゆり朝夕の鑒はいつ
たてしんよう絵も有く萩萩軒を掩ひ薄は
東西の種をとつ池の魚りは鮮さら人
絵縄名のおもしては外木の枝折りある
は落てくさり爲ゝ道ゆも志らぬ也しとも

いくつともなく飛ぶいとつゝをし傍なる
石燈籠も半ハかけ寄すきまなく苔
むしさなから百年のむかしを思ひしむ
今ち殆り寄る小柴垣を四鶴なとの 踏
たらしあるかにやはらん何ら生ひけんかと
なし松はる人も往ふるし生んさすかに
築地のむと好ゝまきるへくもあらさ
古奇 苔梅經の都にこそかゝる 栖 を
何ら見なとまふさをうるほハす孫に
月も出ぬ山はらん人の見たらんにハ偎
くまも見ぬさは松柏の蔭 生ける熊 鹿の

寢にも山を慰る蟋蟀の唱也滿るにも何
たまをまし月の澄なるをもいかにかもて
あそふらんなと思ひつゝあやうて唐に立
何生ハ西の小宮にも月に移ぬにける

松風やいつしか唐ハ月のをの 鹿野

○月ひとつをひとりかちの今有ひしとハ
古人一寄か風興なるもおとしの杖な人 誰
彼月の名たる事ゝへ旅立行あるか
予ハ兎角しらず出たれぬハ七日の日
の暮るもまとてさすよひ出りけり先ゝ
弦奇の蔭を離生は咲て志はしハ出むに

似る事と老人つかれやすく隣巣に帰り深
寂たる月にむかへハ日比の友に逢しに
堪へせらる

江のふや機を忘れたる月の友　徐英

○いかにも脊の高き山伏とのいひたるハ
扨出たり大なる月か出たり[illegible]十六夜とて
五尺斗の月か出たりといへハ枳おく　垣
よりいつも出たる人扨ちいさき月か出たり
秋へもへる風きおとの月か出たといふ[illegible]
弓紀の冥雪をつとめたる頑なる男　[illegible]
いひたる脊の高き人ハ大に見え脊の低

き人ハちいそふ見えるにやたく藥釜蓋な
と有るものをとそいひたる

三日月ハ月のいろはよくしの月　芳水

○芒ハ月に犯く沸しく月ハ芒を出る
清しきを[illegible]青青[illegible]山に尾かけて瓢の
酒にあつ碌ふ折うら松風の姫とんに
見きし入浪の枕に高眠し高ひ磐
然るをもて[illegible]を語ふ南山壽

月夜よし何事すて往ても草昨す　田江

○つゝ[illegible]翁ひとりのちさ子を[illegible]へり西くに
[illegible]ものを[illegible]へよとせうりつさまし　[illegible]

火鼠の皮ハむさしとて手ニ嫌まず仏の
鉢ハ抹香くさく鶴のうしろの玉ハ髭に
重しなとおきなことさゝ〳〵なり 獎因の
杜のえもいはぬ菓のむかしを来り 笄七宝で
飾さをつましとも松やまほ菊おすりて 何
をかとしをんと宮ふけまおれかとゝへる
蓬莱のみやあとなるハ杖の月 對竹
○世を麻布に営ほハ古人の得なり
月の林間にいさよふ仏地をやらる
二世来のやうに浮世ハやしさし 葛女
○紫月のけしめ屋紙の玉についてそこ結

家ちての館を訪ふに三家月の掛ひなりたり
今宵ハ朱樹の翁に對しゝ事
何の木のあかりもいたず私の月 奇渕
○淵柿のをつ落したるゆふへ月おそき
畑かたつ
鶴脚に日ハ押よせて杖の著 栢亭
○月かたかふまつるものハ痛る事しもなく
すと以ふおきゝ事をなりてわしさへのおろ
よりて三日月の黒につかふまつりその御なり
ゆきをうかひ侍るかおろすかしの墨り
なまふ事もまれくふて風流にそこちあひ

よひくさしに御名かはりて萩の月木か
れの月なとさひ為る御名もおそしまし
けりこの里ハ君ナ丈夫なるをなへハ
為ひく御名世にかくれなく名月と
中殺ひけり是は此夜月男と名の事て
御宿当となる

月にきる事ハふりハおもしろ　東陽

○須子ハ河をれに姨捨ハ楽し不破の
関屋ハ鞍も炯も

ふ破の月泣笑悟て来さりけり　秋峯

○秋ハものこれあハれなり酒ハこのあハ

批七頁五ノ下五

れをかくすかくすものハなかれたし　也
様にきゐ是一事を唱し也

坂内るハ萩の為なり朝の月　岱呂

○さしに地をもしる一夫ニ至あり穀に雨月
の二ツ事をうつ面ハ瀟湘の夜の面打に小舟を
洞庭に浮ふかやのぬけ為もつくろけに
礎の破れたるをも塗かへにあまりに河を
河をたるを手かくしとにかまに不破の名
あまりとも夜の笑を浮て

陸元に月の面しゆる木の夏　楳洲

○むかしく二むかし又一むかし　海書

三むかしのむかし須磨に植たる木ありしハ
とこよ松風庵とそ呼ならはる人て舟あの
庵か一本接木したまひしハきのふけふの一茎
四昔主人としりましめのゝちかく
四むかしの春を須磨の盆かな　午風
○のさましといふハ須磨ハいんなき
ものゝあはれちかくらしく見ましハ
松風むらさめ一旦いつくしみまよふ事も
まてまてもさて風雅の種なれハ人とし
なりてハ須磨とくらしきものハなし
秋の夜ハ須磨をちらくさ歩しかり　雪封

○清洲古城跡にて
行ひとつ畑につゞく城も哉し　霍人
○蜀を嫌むハ曲緒書の夕へ須磨さはら
ぬしられさおもて秋の気中霜に須磨ふり風
まゝくしさる須磨ハいつのまにへくもなし
と昔ハ家をおりなりかへくせられてんを
名所に移ん
○二見の浦にて
秋ナよ渡ナヤ主命りハ月の秀　鷹汀
○閑坐
名りを継まうおもて出秋の客　くせ
推巳

名りや今来し雪ハ广なるに　　翠川

○山陰

名りやせかく雪る雪の道　　省我

名月のさ雪ハ笑へ鬼かいう　　圃暁

○舞津の時へをはしりわるきこゝ

出るこのかし雪ハ居られ長杖の月　　五雄

心ゆてのつもるゆ月夜小　　硯静

○花のをとにゝ雪ハ死んと覚えれし

法師もまた雪ハ陶家の古にかし給へ

徳利にかりてんと望し酒すきも死縁

の風流迫り遠くし尚附我に望まし

概七頁五ノ下七

生て居く嬉しや家と仏ふの月　　竹有

○不破の翼屋の古縁に入る雪

そらおとよ不破の翼屋の有よ　　平安

○雨ハふきしともよ紅葉とに降風ハふけ

とも輪にさけしに木綿烟の雪と降日ハ

人のおもひのうかれこそすれ

名りをたれに山家の祭小　　卓池

○万卅園に萩ゝ墨芒ゝ里とて雪ゝ

をうつし植る所あり年とに雨さき

祝ひてあらはしかりおとし彼墨に二ツの

柔さく生ひぬ月の雪落てハ夜毎に延び

松の朝日こゝ見まて八日ふく甚色増りぬ
此夏芝家うゑて拾ふ蕎麦に似たり
似たし似たるゝ事しまほく見を惜して
むら菊の月をうゑて学ぶ木の雪が　九岳
○老たる友を荷る厨と名付て閑ふ人
詩りの栗田口に荷を乗とて炭うる翁あり
或時は栗田口の翁炭うりに来りたまは
従者の栗田口から来つゝゆゑといふあるし
犬のおとしに拝てたをとより雑飯を投
出ぬ翁怒りて家飯をうゑひに来るに
あらはいつもの炭うりに来るなりかゝる

あしらひいかにし家うゑ給ふ為しかし
のゝ志るあるしコゝひてさることあり
家屋ふ方を閉ひたるか荷る厨と名
付て呼ひたるに能なりして家僕に来る
なりよつゝ栗田口から来つてゆゑといひたるを
犬のおとしに拝てかくしなしたりといふ
翁もをうしうりて楼経歪りぬあるしも
やまさきにまなりて家に酒詩り一盃とて
其ふさいつおきへつしたりやおもしろく
なりたまハ生うゑ手ゑをてる家も繊にさ
けふるゆ家も翁に来ゝたんと取出ぬ翁

ほくゑくて見をとりて過ぎとす

夕月を引かゝりたり犬の子番　求巳

○なかハ深く住る状なもふ事のあるて

名りや有明の雲も名のこ　若翁

○萩芒をおしなべて伊賀の山中より長月

老人を送り来りて袖をつかつ郎ハ尾張の国

寐覚の里なりけり

松風の雪明納き笠ハ　伊賀松居

○簑笠ハ面をうそいとへと青の月に

何をいとふそと呼よ里ハ

雲をなりて月ともいふ　葉山子

枇七郎五ノ下九

○朱天が詩に感すとハ蜜蜜を詩ふ　[illegible]

なるんかきれハ塩蛛のよるへの糸に梅しを

まれを鐵が新鋳にたゞ里の家居する

乙鳥の鳥にもれのまくか時を得る

ふこそ小町が哥の優にめてこそなも　[illegible]

のちまハ素もたのまし　そのまし思ふ

ふに杖の時を里をきくかねて

蜜屋や月も薄の一束　祢　杜農

○高橋に光りて鐘をつきしもいまハ

古く山川海陸の月ニ家人くの見古し

得る名所くの月を古しと月見の場所に重

をうきとゆる二階へものはかしは何のり
しを幸に鼠の古巣もる月に酒徳利
を奢らせあの山出の峰に何層を造らう
ひ長橋複道を渡し通しく四家ずりせし
たれふまことに飛ノを見下に見なし
砧虫の音を手枕に吐蟻家の月夜ハさぞ
をとるどん旅寐の月の薄ふとん二階の月
又古く夜ハ三日 夜のむねへ這の法ハ
三千世界を我ものゝ無しく云ハ湖上松原
をかけり月さへ曇るくそ覚えたる
大雲に小咲うちして月ゆるぶ　　青洛

批七級五ノ下　十

○非さて唐に一つの象雲あるを象雲の下に
美味ゆり味ハ多くに興ふかく蔵りて
日新を負ふて宮芝と為ハ東ハ
寂寞の事をもつて宮に平井の人家を造
さくことより子猷か風情をもふぬ事
ゆゝ法宮下に机をよせて象に自然
の象情を得ると
唐の月夜へよるなと聞なり　　黄山
○三笠山のあらりに君をしりて
月の出る山を高尚に出しりす　　野喬
○疑團虚空無躰

ものもいはれせめて宮んもらうかはしく
是家方のなよいさなくと狭きむし
ろにひさ所し合せ酒くさかはしをの書
おらし興に業をすりやく酔て寂も
又小す四聖の出家着に入る事ハ
月をや山の端にかゝりて只今入れ
ぬり無言の王子ハいろにしたれハ
おしきハなく痩さしたれて月と共に
消んとせさる無情の交りをむすれる事
又に家教なる事をしらす
洲しさを知つ見えて月ハ死の山　沙鴎

○良和山にしく月をうくへハ
ふとうくふおうあり旬を
誰そとくへハ
ふの月の友や同しまつくへに小夜
月ハいよく沈むりぬ
小彦を月の友とハ志らさりき　大巣
朝りやくらいやうても月の秋　月巣

○誰不送春秋　一年三百日
煙霞藥此身　恐治愚癡疾
月霜を鶴に枯ふる郭法師
かゝる志つさへくしきむしきハ太子人に

とゝ名ゝまでいひまけも泊をゝ居るゝ
又人来ゝるゝ今宵月よし橋まで出ゝ
いさや松の下まで出しとのうしたまへ
能も始めらして

山里の月来をはまへ庭の松　士朗

月は松の葉かくまゝ夜中黒ありむし
の夜くあるゝと夜は三更をすしむ

松はゝ月のゝ葉のゝ　梁臺
もこゝと雲て月さす入江ゝ　儲史
面の外月やあらんと出たりけり　関叟
草小蘇るかくしあるさよ月と云　夷栢

○おとし荊棘をひくいて十畝三椽茅ゝん
とす地は湖高山のふもと麓蓮池のほとり
ありけり

蓮葉を目の先にしてはふの月　葛井

○十六夜

星諸を拾ひ初ふ月夜ゝ　孔阜
名月のかゝ世界は有りけり　良平
廉唱や砧をうつやこゝの月　素月
年くや松にこゝろ付くはふの月　保舟
湖を一夜を有ゝ出はふの月　木常

○

[illegible]

美松 [illegible]女
可玄
三ツ 亜碩
、梅香津
三ツ 呑鳥
近江 砂文
国水
青帛
[illegible]芳
[illegible]如水

○

[illegible]

枇七郎五ノ下西

月の出[illegible]ハ月を[illegible]なり松の風
日ハ[illegible]月ハ東に[illegible]の秋
里人ハたゞ[illegible]むなりふ[illegible]の月
秋の風まで[illegible]き月[illegible]
[illegible]き月[illegible]
名月の不[illegible]ハ[illegible]りや
[illegible]の[illegible]の月
名月や[illegible]の浦[illegible]き
蚤ともハ[illegible]の月
[illegible]の[illegible]
月に出る日を[illegible]の[illegible]

近江 竈山
珉屋
三ツ 楚雀
五道
可竹
三ツ 千阿
近江 文山
ヒタ 一左
大津 宇洋
三ツ 棋堂
坂本 于當

○仲秋

雲霧の朝から月のけしきか　八日　田實
雲ハミな霧の袋よ秋の月　大坂　米彦
月にくるふ猶にわふをよ外の霧　得芝
いつの春もうるき処に秋の月　イヨ　樗堂
やうと月が出るとかや萩の以　近江　古猿
月の出やいさり車も松の氣　二泉
松風に月の明けて山のうへ　三ヵ　百秋
鴨一羽茅や三ツ四ツ鷹の月　三ヵ　介亭
名むすふ手にめて夜もくふの月　、子厚
唐黍のまいらにこるし岨の月　杜月

枇七郎五ノ下十五

名月や江にうつりし雪の氣　近江　玉翠
名月や鴨ふ雲の氣まくら　大商

○成範以に雲の癖あり宗祇に霧の癖あり霧に曲るをとハ慈鎮和尚の癖なり

萩に萩やまた出に付る月の癖　永玄
月ゆゑとて猿に居るさへいそうしな　イヨ　椿堂

○枇杷園にて

名月やたつかしらぬ松の事　楳間
名月に霧のかゝるあし也かな　大蘇
松の月の葉なり月ハ松の上　秋国
月氣を尾花につゝむ山家かな　几咲

○赤松園

出る月や入るか入るまで松の氣　竹趣

山里ハ罪すまき月の見へやうかな　蕉雨

何となふ東の西かしき葉月かな　津技風

○早行

名坂やつる明月の一番の糞　東有

名月や縄手ゆゑ草のこゑ　潜竜

初松につくいく嬉し初月東　月底

松かけやつきおひの雲ゆゑし　野秀

○遠寺の鐘鳥を追ふて日ハ出たるを

名も志らぬ山井も出て松の月　友鳳

○葉の庵と雲ハいやしき名なれとしも

世にこのもしき住居なりあり古住ゐ新

家も志のをしくて

葉の戸や家に過たる月をさせ　而后

月の夜の鐘ハ何處ゆゑて雲ゆゑ　艸人

雨見雪ゆゑ夫さへ月のちからかな　成美

○琵琶橋上に三人の乞食ゆゑ一椀の酒に

歌していひなるハ茶のことし後遠ゆゑ

をのくいひなるハ雪のことし立出りをのく

いひなるハ月のことしさ出ハ今宵ハ十五夜

なり月と見ゆゑ汝か服力志を何つハ出なれ

とてその酒をさしむけ候ハさすかに頼しも
長さて嬉しけるまとぬしける
名月やもきひらも見ぬ佛生　栗大

○碧亭小集

○蠹筆の書のよりけりけふの月　桂五

ある評田舎に住る男大釜にとつ持て
見をふたつなき柄に見えたる事なくなれ
此の釜の中に入る事に成るにある夜盗人
入来り其大釜を盗出してかき持て引に
男ハうまく寝入ゝ夜まも見をとらしけや
引ならば釜あまりに重かりけれハ盗人代

枇七郎五ノ下十七

持あくみて此中に捨てけりなとてかの男
目さめ蓋取し揚てゐん出しこゝろに此乃
夜ハ八月十四夜にあるくまなき月半天に
沈わたりて萩もすゝきも霜出田やうによつ
すこうりけれハ男ハ聞きまとひてこハいかに
あまりに釜をとしてまをハ盗まし
しと云ひけると此

やゝ見ゝ月に掛いふひとりかな　卓老
多夜山を来のゐるにとりて月一頭　鴨立沢 葛三
丁も来るくきけんとるや山の月　大坂 三津人
出る月の大きくこゆるすゝき成　長サキ 祥禾

十六夜の潮松を出殺あたり　大坂　尺芥
はつゝの来る日なりけり月ハ西　信　素檗
としくまゝ見し夜の月ハ同し月　、雲帯
けふの月さてもをしまぬ光かな　江戸　芝春
月ハいつさすそ薦のくるたゆり　奥メ　乙二
百年も流てこれかそけふの月　大阜
月ひとつ持て宿なしの越ひ郎　ミ　竜渕
名月の生れたなまよ海のこと　星川
海山も同しかけふの　月　湖風
松といへハ新の苦なる月夜が　少汝
○月ハ松に竹ハ杉くの嵐をもとひたる

一つゝの丁を薦雲の退つるさま眼たゝき
もあらぬ風情なり畠をのゝそまとも
まらはいろくの新をさちなから垣の外
面より小庭を眠くもをうしなれと
知らり言はかゝぬく月をゝ見送りて
庵の月翌ハ葉山子を見せん　楳葉

跋

玉兎校合しまへるをりから昆仲強士
の梅によせられたる月もふくとけの
寂にさひたる月をもことのかに花えるを
　　三月のまつらに桐の立枝が　桃源
　　菊花や雲そらを縄の月夜が　琴洲
　　手からみて山目るこつ蕉の月　左琴
　　寃竟の月来るりたりうめの花　文角
　　五月やそやアクほハ内につれ　万和
　　今夏に月来しやり柘尾　菊也
　　月の漏るやうに屋根ふけ郭に　李堂

桃七部五十九

門をさしに出れハ月の柘榴が　洛茂良
鍛けや此来柘榴の月か　、蒼虬
すしさの月をちる蕉に似たり　大坂春思
行く高く月に向ひぬ蕉の月　三ノ彡世竹
風薫るかハ小松の月来が　、里栄
ひやくと月もさはや苔の花　丹波武陵
七種ハ八日も志けし月来が　三ノ彡曰人
やすらへ出ぬうちより月の種柘が　大坂長秋
蕉の来の月や竹ともに峰の雪　江戸巣兆
三日月も冬ハ柘るくか　柳柳　三ノ彡雄渕
雪くに伊賀ハ高しみの月　イセ李東

月影や梅のはしなる枝の　山　河内　禾耙

月の枝を知まして遠く火桶ゟ　大坂　井眉

瘦藪に月ハとらまて啼水鶏　京　伐山李

風の来るこゑゝ聞く春の月　エチコ　喜年

二日月の梅の花より細めや　兵庫　桐栖

ちらのうちに志をりし高草紙の束に

素終りぬ

對鴎亭梅美

枇七郎五ノ下廿

於室洛東集席

及古亭硯靜に寄り

人くと共に暖みもしと

鷺田の湖にたち出より

松ふるく塚に生並ひて

うちまゐる波にいくし
舟の艫にしく此し
のとうなり集るに

おもひ名殿

二月十六日

雲なきまゝ沼の小鴨の友程ひ
中しこゑまし梅の天気なりけり
有明の月を霞の雲に見て
猿の心をやしなひにもり
盃ハ滝のなりまに深ふらん
雪あらし吹小家に木を割
約束の雞鮮も程ちかし
夕暮をしとに眉とつて来る

大阜
硯静
周瑞
大巣
野橋
圃暁
茂竜
楚江

なつかしき松より時雨初なかり　白慈
あそりともせば小豆粥たく　大阜
玉の結を結ばるゝ鳥の宿　硯静
嫗ゆく三笠の月の清かきし　周瑞
結つ志りと枯の宋つく鐘の春　大巣
花白色して中稲刈ら翁　沈橋
一束寝て風ひく小袖の菱莚　圃暁
相人ほしけに高麗笛をふく　茂竜
志ろ雲の中より菓の蒙初　楚江
七日遊びし霧かすむなり　白慈
おもしろき魚の名を聞事の波　大阜

こちらは多き黄之君　旅　硯静
薄くとも襟新しき秋の衣　周瑞
胃の芥のやるかたもなき　大巣
杜鵑来ぬ五日のはかとしも　沈橋
罠の松家栖まで新さして　茂竜
咲樹ふ出るかしか飲　菱　圃暁
ぬけてわかしき居風呂の座　楚江
極こ阿ふ家を海ふの中直り　白慈
隈りもなき中の夜の月　大阜
津無なりと浴るに秋の朝霞　硯静
女さかしく熊笠を対　周瑞
かりそめに結びもとめぬ牛弥彌　大巣

角質の守をたのむ　朔日　生橋
手の届くまけハ煤とる古襖　埜江
手立帰るうくひすのこゑ　白慈
花の惠めてくき光の常に　圃曉
筆にはなしの称る　朧　和　硯静

枕七初五ノ下廿三

三月六日二九亭にて

水縁くと春ハ何けにたり八重樹　玉山
畠うちに西く山くのかね　二九
名前のほとけるなの餅のきて　士綱
たき火の煤をおしふ　宮蓋　雲羅
かりかねの横に乾さに雪の月　吐暁
人志ら霧の萩ぬ生むらん　白綾
羨しう秋を約束し紫雲　浦雀
ちりくちりと答ひ煮つく　萬花

兎も角もなくて後の看ぬき　大阜
なかめ家をとゝハ降ぬ　初雪　五山
清河まで雅しの心も加まさ　二九
かゝらひまゝ五ハ　若子抱に出く　士綱
月くらき綾のかりゝ君のふつかな　雲羅
う策を白膠木の葉に色ゝ　吐暁
波ゝ江くと蠡花はく紫舟の　名稜
面もゆらしも那筆油うなり　浦雀
出ふかれの花に中ふかれ軒隣　萬花
四にまくしく　砌る　茶　鉢　大阜
つくろハぬうきよいさ海の長雲なる　五山

枇七郎五ノ下廿四

なるさまくと壁の大文字　二九
立掃ふ松の木からふかつる　士綱
羽ぬけ鳥の地に落もをしぬ　雲羅
すくか世も吹まさやしを　燒塩　吐暁
岡に綱とる　志度の湖　待　名稜
西行と知己に素流染餉　浦雀
利根なやつを呵責家端近　萬花
嚔から侍軍中新蕉うなり　大阜
きくの花白を夢て寝て居る　五山
小むしろの月ゑんくと　燒焼　二九
寺の碪ハまけて寝しき　士綱

癢痒の四日酒をつくして
何枚になるまハ来な世の中
こゝ以てハ心を棚へ揃へ並
とらまへ雪のなきハ陽炎
見ればけふより日の照る山ハむかふ
君の恵しく舞へ霧の夢

雲羅
吐暁
白猿
浦雀
菊花
大阜

枇七歳五ノ下廿五

三月廿日蝸 鷹木
中浦にて

柳橋やひよく草に浮蛙
ハるおもしろき里のむら雨
夜更ハ一位つく春と寒く
来しまともなすなり居る
腸のきよき好くへを垣のお
鳥の糞をもなれ杉風
花をつゝ栗手の塩を黄ひ竜
むかふ竜に世をのうも来て
きゝ以くと奥座もなき鶴

士朗
大阜
岳格
秋峯
硯静
士朗
大阜
岳格
秋峯

塵れし流に明の鴨川　硯静
憂人の新り盥をふきかふり　士朗
むくきのやうに庾てくやしき　大阜
蜻蛉の翼度月になるやらん　岳洛
御つ志中里のたやき雲の霧　秋峯
七閑のこと葉のけを閑咎　硯静
ふ絲をつなぐは波にゆらるゝ　士朗
花鳥は上野をさにかゝ御菜か　大阜
根あきにしたる躑躅賣也　岳洛
かゝくしと田螺の売を掻蔵　秋峯
賤か小家の琴の軍にゆく　硯静

志ほ世ゆて袂にかくに白芙蓉　士朗
もの靜なる梯の末の　月　大阜
蜩の似楽新墨原漏らふる　岳洛
鶏せてゝいふ事もなし　秋峯
繪殿はたゝきちそまゝに紫繞　硯静
宇治は今朝から橋私をうつ　士朗
雪の雲しくれの雲にとのこり　大阜
むくよ母もとせゝめ啼らん　岳洛
狸ともなして籔根の鉦なき　秋峯
まくらほしかる胡鮮の太　硯静
白波に来は明かさの山見えて　士朗

この税軒冬酒屋なりけり　五雄
初花に絶ひかけしる絲　雛　岳路
手にのせて来る菫　むしとしと　秋峯
鬼貫か水にむうへに鳴ひたり　五雄
泣きぬやすとのたれかの種　執筆

批七郎五ノ下廿七

追か
天明八戌とし三月朝の茶業ハ
舞るのまきハひに加へまし　は
志たりふきのをしてけ夜の浦に
くたまを来つく由可楽の人くに
助らせ加へまに居むをひして

曉臺

櫻や素菓沖の鴎も桑に刻に
の志つ志しけつ芦の角　俎　大阜

山の雪ゆゑの面に高雄とく
後堀うまに出る以ませ　き
まて御る御つきに睡き社の月
籬かくまし　有の御きうか

社尹
民情
帯橋
聽吳

枇七郎五下廿八

書

元日や四つに置こし絶ふ事
元日や月よりたやき梅の花
花ぬ里ハ碌てハ又も出雲　汁
世をよそに思ひすてても花の春
美果の小藪偶ひに来りやり
麻返まハ子若菜賣　里　男
鶯や上杉やすくきも此所だり
鶯のなく口藪持し小寺　かな
とやくと春ハ来にかり伊勢系
おらまてもくよきに柳　汁

蒼虬
少汝
桂五
卧央
葛井
橘良
秋道
花狂
鳳洲
應汀

蘆の葉や雀をなきむ貝の口　國お
其の日もすゝ山間のかゝき　芝　于當
山家よし里よし信も其の風　孔阜
なる風や美しかき神の傀儡師　雲谷
韋詰をなし亂のこゝろに其の珍め　竹堂
菜の花の壺民を破れし桂笠　推巳
溯へうちさせ雛子のあるくが　大商

素雅吟

和家菜の葉をとゝはやに出ふくが　吐山
流れ木のこゝろ棋の兼ひとつ　智風
のかきたる人の詳へけて

る人ゝ花の阿るしそ山　橋　鹿地
花さかるも利根な白ハなかりけり　也梁
人のうへも老木の花ハいかりしき　大蘓
因螺すも蛙すも蔵さのうへが　卓池
海風とゝく新さに鳥ゝ雪の月　雄渕
今捨るまでも折たきはしらが　梁臺
をしくしと雛ゝるゝ雪や男の子　五道

餞別

けしやかのをけを蔵の　はか　兆雲
筆なかるる蕉や陳子に帰丁　阿城
けすや此一つゝハ腹海さら　桂堂

加らまろと常も妻川蛙かな　乙彦

夏

蛇さはときけハ杉そろし京ゝ衣　蕉雨

あつもの元高賀の雪居をこれ竜　岱呂

ほゝゝ事は不二ハちさしと蕊やらん　魯堂

卯の花や水にうつ来る弱か　岳

うの花の頃に息出は寺子ぶ　一覚

木曽川や二粱多へ落は春風　専坊

旅行吟　三句

岩曳に出たか垂井の一栗古雪　元美

こしか春や鳥もなりぬ作蚕泊　大嶺

批七部五下三十

短夜や何事もなきに茶まくら　亀年

浪花古今乳口菓店にて

燕子花こゝも都の寺りは　弘

下京や鶴鉢にうる　葵　菓　弘秀

さしさや鯛にとゝまる和かの浦　砂牛

角力とりと肩背並へさく涼ゝかり　田江

むらゝ雨ハうらの岩あり夜の月　長安

萍の花や浴魚か花まくら　竹有

秋

おろよく杖ハ来にけり菓のつ　菓屋

文月を桔梗の一布とおもへかり　九岳

蠑螈をやきこむ月のむしろかな　可升

貧家の児象

啼まひて草葉にせるゆとこかな　一葉

かしおくも唐の留主居や蟋蟀　升趣

膝琴や蒼も笑しらぬ唐の宮　秋風

淀升内のけしきをおもひ

あはせこそ

曳舟の鼎をひくと出る苦うかな　梅冥

鵜の鳴出松原の西日　うかな　五雄

雲鶴をさへむかしに有り女郎花　方明

いちまの山中にやとりこそ

赤葉のゆふきり深き籬うかな　魯隠

閑居増寂

ひとりし寂つくしても菓の花　来山

寸鉄に翁る今ふまでも深る紅葉かな　蛙岡

名

鼾さへ蒙をのまゝに神ふ深まる　桐栖

木かくしや笠をふきとる兎の子　砂文

山雪の尾をひく雪の末のつらかな　可青

うぶくと雪にして見る小升かな　菴山

降うきこそふまいにて雪の芳花　李臺

風子を送る居をてかく

[illegible]花の[illegible]事をとゝるしかゝ[illegible]
いと[illegible]りし[illegible]
[illegible]
松風ハ[illegible]より[illegible]大　雄　加川

文化六巳巳年
晩夏

秘七郎五ノ下三十二

柴村戸集序

大和うたかうたも心も様ハ志むる
ハ只[illegible]なりけれハ蕉翁の道
に様ハ人と見ぬ世の人を志たれ
志ぬ松島のほとゝきほとゝ志れ

曇ハ朝の花雑波の芦の下露に
心をあらて雪積る年の暮まで
風雅の心うちにうこきこ云葉ふかこ
ゆらハ風にしていふことなき地ハ伊勢の
清き海原にハ住なる杜鵑なりけり　岳輅

柴の戸

馬街園杜影發句

杜

杉霞しあとをつうしや茶　芒
杉風の止ときいふ雨も尾茶ふ
同し杉にとまり飛へ鳥り杜の蝶
杜風の裏に薮の旭　かな
中ゝにさちいさき梅ト見初嵐
くふそかり人に霧金月香ふ
雉かほをあ笠ハみようそつ春ふ
雉かほか咲ハ蛇ともせ佛しふ

史科の出も見えたり杜の一番
杜の森をとりまとめるとの事なれば
むしろ戸や鶴の森明鴨の番
鹿鳴こゝろの鶴く麓かな

冬

日常日落日もなきたる木葉かな
木かくしの木かし出たり竜田川
木かくしの乃ゆゑに浮る筆かな
月明の下に四五本冬木立
うゑしまとまに紅小花の芒かな
松の根に枯いそきもるをもかな

秘七部五千卅四

大雪を合点にて明る戸口かな
跡しくき曉のうゑ打てり

写御園

旅人の春も寄して冬を結
大雪と仰ふてまをかゝる松のつ

夏

宵月に二度京を志て時鳥
垣ゆひか母に乃ゑし 茶の木
夜山にはさまれ山なり太宰良の所
竹の家や人に吼つく里の犬
夏の松ハ宵から白き東かな

途中

若井の面ハ止かり嶋の蔵
寂しかに鳴とおこへよかんお鳥
幸湯の雲より古し岡樹風
山里ハ雲によるゝ幟かな

神詠山

若し面の中も匂ハ朝日ゟ
仲樹る日とゝ提り小笹ゟ
あつき日や笹葉さしなる牛の尻

春

家ハ三方来るゝ心かをり

枇七歳五十世五

初春や面の降さへ不起けしき
雲はりぬるしやうなり春の雪
鳥の来る枝から春ハ咲にかり
おとしかゝり黄鳥の鳴小庭ゟ

鈴鹿山

鶯の蔵か杉風か川の春か
春の日の春をかけて入山鳥ゟ
見るゝ面ひに嫌しく思ふ柳かな
和樹やむにつかへ春咲かぬる

旅中

大津にて眼につき初し乙鳥ゟ

其面の中にも落る覚うか

嵐山

としくや茶にすれ勇松の枝
ひつぱらく菴の戸ぬらす雄が
ちる花に一生をつつまぬ蟻の道

宮井

幸諸や都名所彩雲の茶

四季混雜

うつくしう給く菴の火桶かな　松崔
美学やたり付て暮る牛の瓦　石卿
月影のとくや其の落　水　雪箒

志ゆく其孫ハ嫌つかぬ　学　枕　塩叟
雪の日の付出し志さや其所　霞舟
ぬらく花たらぬ日ハなき山家が　竹奥
鶯啼やひとりたんたる横　橋　其仙
花曇するや雀のかしらすて　寸明
神風の伊勢に生まて萩の夢　探香
所ほくの草にもなくて鳴　雄　宗古
冬をそやい田の麦の　寸斗　文俗
立　久ぬ松かし松の月夜が　湖秋
ひとりぬや燈火とも秋の雪　巴陵
菊ひきの附屬て出る一里塚　十精

免くる日やはとく分に忘む林の風　杜影　老母

ゆふ菊やこのなかうしう屋ゝ鳴　東女

三日月やつゐこうちなる梅の花　兎十

菊てまた柳は霜に枯にけり　菊弥

ゆふ魚の椒ゝ産て星の　意　集蛾

栄居

楊簧戸や扇胡魚の子きれつる　呂兆

ゆふ月に枯花をひとり戻けり　巣居

枇七郎五ノ下卅七

雲月やへはしくこれ書　蓬　石　朴臺

扇とは別る時の名なるべし　桂五

角摩山は風乃袋を啼　桂　茂東

十六歳の賣買のとて月夜が　友風

月ひんとて猿尓をるさへいそうき　椿堂

初屋や雪にぬれたる伊吹山　省我

白雲を踏さけてかぬれとき　乳阜

志ゝ雲を忘にあてし林丹が　九岳

湖の水に吉野りをきぬるに　田江

秋風や掃ききりくる寺の門　午風
屋の来る山をうたくをるゆふべ　求巳
山里の東なへるそり厂の寺　梅洲

東鎌なまて

風ちよ虹の絶橋かくしたり　千阿
秋風やちさくしたくぬ山の奥　大蘇
かしこしも菴の前当屋や菴　竹趣
木かくしや宮へ掃ゆ　やまの軒　元美
ひきしまや西に左りたる虫の志　淇石
茶くもり日ハ一丈も山のうへ　虎更
萩の寺佛ハ何と笑ましい　硯静

掃掃し茶の籠にて立ちたり　加つ
秋ぞ夜月のことの来り茶の上　梁堂
子供来ク国ニ穴堀清水ぶ　暁浦
時雨ても妹ハ行すや萩の夕　卓池

良来

雨の月あるしてそれハ人も寝ぬ　仲吾
志の里を人ハ志しすや霧時雨　葛井
雲たやしまし光の鳴も雲ハ日や　野秀
田に花ク掛てそしい夜鳴蛙　珉屋
多蛙や鶴ハ秋のかんしたる　黄山
湖のしたらいても鳴蛙ク分　野秀

廉明や碪をうつや浮の月　素月
正月のいくつもおしき梅の花　芳水
かたつゝハ沙かさ浮し　嶋　蛛　槎雀
菜の花の物ひめたる小面に　湖風
煤掃の後に笛ふく　木の雪に　卓老
多き一葉に松のこまも　松の雪　帯梅
黄雪や日の阿るうちも月と梅　丞芝
鶯のなきなれよ　苔の霧　沙鴎
山里ハうるめ　蟻し　涅槃　緣　大阜
大かさハ月をも見侍し　是そ　あれ
つてきハ人の老となるもの

おしかさのさ風しよ　ハ雪る月　秋に
蜜の子か　砂くるひ　もとる　梅の花　六磬
元政か　夏ハさめ　かり　小春　碪　永秋
岩を　寄る　松や　小春の　鶯の　こゑ　竹堂
眼よつくハ　冬至の　打花　かしらに　吐山
七年八年　黄葉　金葉　演の　所　金谷
こしか　春山　さふしの　まも　芦の　風　駕風
白牡丹　二日かゝつて　咲よかり　昨来
篭なくる　墨や　陣子よ　ゆる　丁　松華
梅ニよりけ　今て　嶋　雲雀に　阿堪
蜜か　家ハ　風根　かしら　やはし　天の　河　翠川
丞雄

月にをきし春しゆよむら時雨
かけこゆる水やすくハん梅の花
舟からも脇をくゆるかり萩の花
笠をしむ京名ハ[illegible]拓尾花
蝶飛や朝く晴る 菴の雨
廣の戸ハ坤かたるを喜の雨
是ても晴くも杖に月の雲
新深き杖に降かり杖の雨
[illegible]りくを鳴学の名を花ぬれ
家ゑとつ雄も[illegible]とつ丘の杖
今ゆるやうに明かり春の下

李東
周瑞
杖峯
梅間
康野
崔鳴
橘良
青川
方明
栗大
圃暁

桃七歌五下四十

花の身のまつ蔵つきぬ雲の宿
無月雨に[illegible]なる雲の親子が
立むかふ杖をの[illegible]杖の雲
猿人の足をしと[illegible]夕雲雀
麦烟やとくもくとたるの雨
[illegible]しの[illegible]南田川
端[illegible]をまきしむ月のむしろ
[illegible]雲や身うちきもせず月の雨
黄雲も帰や雲屋の乗の雲
[illegible]
朝庭の髭につゆる 横 [illegible]

桃林
其白
李臺
丘高
左涯
崔人
可竹
奥毛
推巳

[illegible]

雪封

月底

對我

梅蕊

魯虹

淇六

昆明

批七新五千四十一

士朗

大商

呂兆

岳格

杜影

呂兆

士朗

人のきゞんのうつる　山　時　五雄
新つめハなうらりくとうむくえ　岳格
免り逃て世ふ志くまふる　秋峯
大寺の葱の肥るころなまや　兆
加ゝしもとゞぬ母衣に泣出し　朗
蝶鳥に瘡おさへくりしまり　雄
灯影のゆりく茶のつるく　格
糟屋の一雲茶を膝にて　峯
を江の人と晩乞ましまれ　兆
大黒ハ絵に盗まれ玉ひけり　朗
桂木の中にくゐしきに　嗚　雄

秋七月五ノ下四十二

柏くさぬ猿の拳女の衣さに　格
高麗の縣の和　皿を買　朗
給ましの月のまつまもをまれハ　兆
ぬるてのうるし鶯ほ　峯
胡露に絵を結ふ負ねもの　椿堂
侍ひて世にあらぬ里の　格
人くハ杉の木のるに眼を結て　峯
あらゝ柏の脂りそへけり　兆
棟札の古さ　六百　年　雄
四月八日　福壽学　をく　堂
丹の茶を雲の衣くと眺やり　格

素足のあと残撥けしてり　朶
姫宮の社の旗ハふたつにて　朗
篝篆のぬまこ中へ日の出る　雄
夕月を象寄枝に象へたり　朶
酒に一年の葉ぞれらハや　格
楊徳に髭蝉の先たちて　兆
流の畠をのれる　関　雪　朗
十日ゐと夜明の雲かうつくく　堂
ふつくりアをきりぬ萩の茅　兆
蒼さりり　衛士ゟ焚火の灰の話　格
来る為ひことに霞あをまむ　朶

枇七郎五下四十三

柴戸跋

杜新ゟ遺稿を柴の戸と
いふ紅塵市上の住居
なりし芦荻の深寂に世
をすぬとる亡人のことなる

へし其子兎十友人呂兆に
はり見こゝ事をさくら
本に見る見りて友人の信
おろかなる寸孝子の事終る

士朗

枇七郎五ノ下四十四

士朗曲女の名居梅花園に
つとひぬかしこへ行ひ
いとらかに来とりてこれを
曲女の句をとまるに来る
春に来みたらみ上の所にて
梅にしのせんやあと

文政八年乙酉秋發行

梅花園藏板

大日本國郡全圖

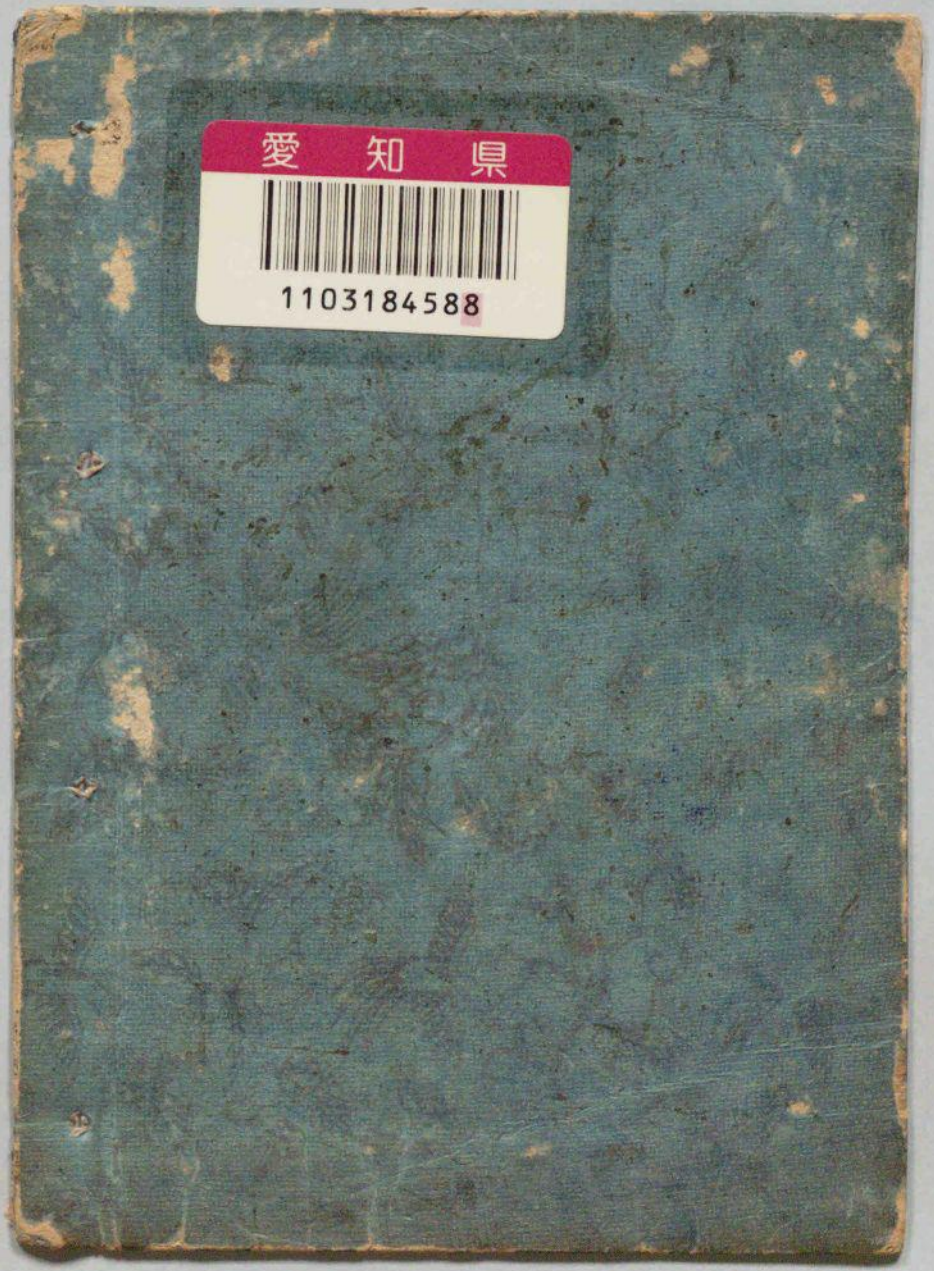
彩色摺箱入　全二冊

此六十余州の全圖ハ一ツハ經國の大業に志ある人をして地の理を知らしめ或ハ旅歷の客細國順拜の人々勝槩古跡を探り神社佛閣なんど我爲ぬるに必用の書なり勿論その國々の城下郡縣村落山河にいたるまで盡く彩色をもて一覽するに易からしむ実に東谿翁が積年の工夫を經て如斯大成なしたる古今地圖の書の窮るものなりに求めたに覽てしたまへ

尾陽名古屋本町七丁目　永樂屋東四郎

東都京橋南傳馬町一丁目　同　出店

藤園堂
5冊
700


愛知県
1103184588